「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ㊶

小泉とし夫

■コロ島に向かう昭夫

引揚げ列車の第一陣を南新京駅で見送った昭夫は、いずれは自分の居住区にも順番がまわってくるのだから、やはり身辺の整理は必要かなと思ったが、係累のない独り身だから、それほど算段することもなかった。それでも少しは小ざっぱりした下着や着衣をつけて帰国したいので、古着市に行き関東軍兵士の着古した軍服を安く手にいれました。

そのころ、競馬場跡には昨秋肉親を埋めた墓穴から死体を掘りだし焼いている姿もありました。帰国するにあたり、お骨を持って帰ろうとするのでしょう。

ポプラや楡（ニレ）の木立が夏空にそよぎ、アスファルトがとけて靴跡が残るほど暑くなりました。そして八月下旬、いよいよ昭夫の居住区にも引揚げ命令がやってきたのです。

昭夫が居住する二階建ての宿舎には牡丹江（ぼたんこう）からの避難者で、親子三人家族も同居していました。満鉄下請けの運送会社に勤務していた夫が、昨年の七月末に召集され今はシベリアに抑留中らしいという。

五歳と三歳の子供をかかえての生活は、行商や満人家庭の洗濯仕事やらで難儀しながらやっとたどりついた帰国の報だったから、身支度になんとなく浮き浮きしているようでした。

長旅のための食料に三人分の米、乾パン、砂糖などのほか、飲料水用の水筒、炊事用の鍋までも用意し、子供たちの着替えの衣服もリュックにギュウギュウ押し込めておりました。

身一つの昭夫は支度も簡単でした。若干の携行食と肌着一枚、それにけがや食中毒に備えて赤チンと保健薬、包帯を用意しました。それから大切にしていたラシャ製の靴をリュックに納めました。八路兵士が履いていた、あの粗末な布靴です。

出発は八月二十日ころでした。南新京駅ホームに入ってきたのは石炭を積む無蓋貨車で、それでも引揚者たちは大騒ぎしながら乗車し午後二時、三十輌連結の貨車はコロ（葫蘆）島埠頭めざして発車したのです。

（毎週木曜日掲載）

あざらしのいる海

あざらしのいる海は
カラ　カラ　カラカラと鳴るという

あざらしのいる海は
氷塊と氷塊がふれあう音がして
それが
カラカラ　カラカラと鳴るという

実はそれを言う人のなかに
あざらしの住む海があって
それが
カラカラ　カラカラと鳴るのだ
それが聞こえる人のなかに
氷塊と氷塊がふれあう海があって
それが
カラカラ　カラカラと鳴るのだ

あざらしのいる海は
灰色の雲がひくくたれこめていて
そこから灰色の雪が
毎日毎日降るのだという

私はあざらしを見たこともないのだが
それを聞いてあざらしが分るのだ
世界にはあざらしがいる
世界にはカラカラ　カラカラと鳴る海があって
そこにあざらしという
いきものがある

その海があざらしを話す人のなかで
永遠に鳴り続けるのだ

（詩集「動物哀歌」から）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑫

小泉とし夫

■海の見える収容所

列車が動きだすと、どの車両からか「さらば新京よまた来るまでは…」という唄声が流れてきました。当時流行（はや）っていた「さらばラバウルよ」の替唄でした。おそらく首都新京に永住していた人たちだったのでしょう。昭夫はひそかに「さらば満洲よ…」と心で和していました。

昭夫は大連港なら知っていたが、コロ島港とは聞き慣れない地名だったから、居留民会の方に尋ねると新京からコロ島埠頭までは約六百キロ（上野―二戸間とほぼ等しい距離）もある港町だという。奉天から山海関へ通ずる鉄道沿線の錦西駅から遼東湾に突き出た半島の突端にある港で、大連・営口のような貿易港ではなく貨物船専用の港だったというのです。

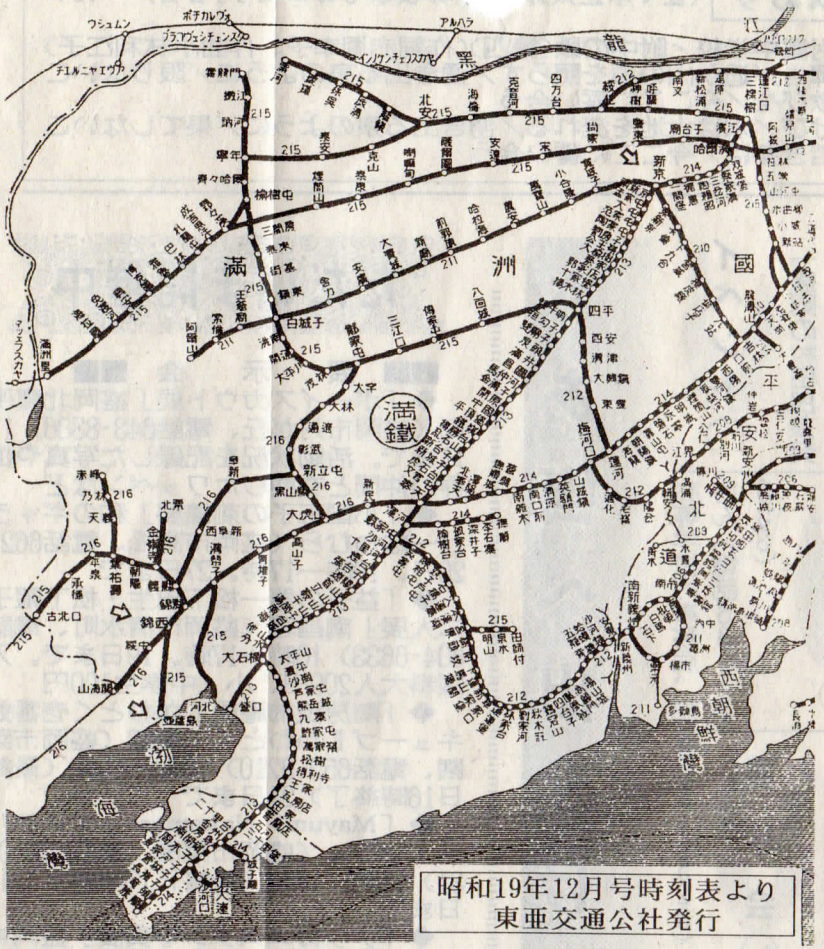
列車は途中なんどか理由もなく停車し、そのたびに一人十円ずつ集められました。戦後、南満洲鉄道が中ソ両国の管理下になってからの悪習で、運行を止めては心付けを要求するのです。

酷暑のなかを列車は二昼夜ほど走りつづけ錦西駅から支線に入り八月二十三日午前、茨山（しざん）という駅に到着しました。コロ島埠頭駅のひとつ手前の駅で、左手に青い海が広がっているのを見て全車両から喚声があがりました。「あの海は日本に続いている」とだれもが思ったのです。

台車を降りた二千五百人の一行は、駅前からアメリカ兵の監視のもとに約四キロ離れた高台の収容所に向かうのです。老人子供を抱えた女たちは大きなリュックや荷物袋を下げ、男たちは乗車の際に貨車に打ちつけた材木・アンペラを撤去し、それを背負うのです。この材木は収容所の燃料だという。途中で脱落者も出たが、みんなでかばい励まし合って収容所に着きました。

収容所は元飛行隊の兵舎で、レンガ造りの建物は焼かれ壁とコンクリートの廊下だけが残るバラックでした。並ぶ兵舎を夏草が包み鉄条網で囲われてはいたが、台地の東方に湾の入江が眺望され、まさに海の見える収容所だったのです。

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ⑥③

小泉とし夫

■引き揚げ船を待って

コロ島は各地から集まってきた引き揚げ者が、乗船の日を待つ集結地だったから、引き揚げ者でごった返すありさまでした。収容所は日本人の小学校舎、会社社宅や兵舎などだったが、人数がはみ出た場合は馬小屋（厩舎）があてがわれ、広い土間に何頭かの仕切りがしてあって一頭分に十人ずつ寝泊まりさせられました。

昭夫たちの兵舎跡バラックでも、水道設備は不能で一キロ離れたところから水を汲んでくるほどだったが、それでも恵まれていたというべきでした。

食料としてコーリャン、カボチャ、タマネギ、ナスがかますに入れられて供給され、庭に設けた平釜で煮て皆に配られたが、お米を所持してきた家族は庭の離れた場所で炊飯していました。さらに収容所の周りに満（中国）人たちが臨時売店を開きさまざまな食べ物や酒を商っており、蒸したジャガ芋屋には列ができるほどでした。

昭夫たちが収容所に着いてから連日の雨で室内はカビ臭くなり、うっとうしい日続きました。衛生状態が悪いうえに疲労と栄養不良とコーリャン飯で下痢や血便する病人が続出し、一メートルの深さの溝を堀り「トイト」とよぶトイレを急造したが、伝染病が発生してもおかしくはなかった。

たしかに昭夫たちとは別地区の団体のことですが、七月末に到着しながらコレラ・チフスの疑似患者が発生し、全員が検査のため足止めさせられ、いまだに乗船が保留となっているというのです。母国をこの海の向こうにしながら、さぞ無念だろうと昭夫たちは噂していました。

その矢先に、チフス騒ぎが昭夫たちの収容所にも起こりました。昭夫とは別棟の老人が猛烈な下痢をしてチフスと疑われたのです。その部屋の全員が馬小屋に隔離されたが、検査結果はチフスではなく食中毒と判明しました。危うく長期足止めを食うところだったので、衰弱死したというその老人のことを忘れて大喜びをしました。

そして八月の末ごろ、待望の乗船命令が下ったのです。

うみねこ

うみねこをかもめという人がある
うみねこほかもめと呼ばれながら
あの冷たい逆白波のたつ浜辺を
さまよっているだろうか

うみねこは害鳥だという人がある
うみねこは苗代を荒らすと
うみねこはたにしや人のものを盗んでゆく害鳥だから
滅ぼしてもかまわないという人がある
うみねこは害鳥だと言われながら
あの腐った港の水や離れ小島や
貧しい村の田の面の上を
鳴き続けているだろうか

うみねこが魚をみつけるのは
たかが知れているという人がある
せいぜい僅かな鰯位だという人がある
うみねこはまだ見えない魚を尋ねながら
大きくうねる沖に向かって出て行くだろうか

その時人はうみねこをなんと呼ぶだろう
あれは海へ行ったもう帰ってこないのだ
あれは見えなくなった
いけない悪い鳥だったと呼ぶだろうか
だがうみねこは億年来うみねこだったのだ
億年来害鳥であったためしはないのだ
億年来魚を捜しもとめながら
はげしい沖へ向って出て行ったのだ
それが
うみねこと呼ばれなければならない
鳥なのだ

（詩集「動物哀歌」から）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ⑥④

小泉とし夫

■コロ島出発

いよいよ郷里に帰れるという思いで昭夫は渤海（ぼっかい）湾のかなたに目をやった。少年時に弟たちと遊んだ大船渡の砂浜が回想され、盛岡に戻ったら海のにおいを吸いに行こうと胸があつくなった。

茨山駅からコロ島埠頭駅まで三キロもあった。リュックひとつで身軽な昭夫ならいざ知らず、大きな荷物を背負った女子供連れの家族が多く、でこぼこ道を熱い太陽に照らされ、追われるように埠頭駅へと向かいました。

埠頭駅に着いて休む暇もなく、そこから約四百㍍離れた荷物検査場の広場に行き長い台の上に各自の荷物を並べた。貴金属品や麻薬など禁制品をチェックするのです。次いで身体検査も行われ、DDTを真っ白くなるほど全身に散布された。それから荷物をもって埠頭へ移動せよという。

六百㍍ばかり先に埠頭が開け、はるか向こうの岸壁に船腹のふくらんだ引揚げ船が停泊し、煙を上げているのが昭夫にも見えた。やっと、これで帰国できるのだと張りつめていた気力が急に抜けていくようだった。

波止場に着くとまた一列に並ばされ、各自の写真の着いた身分証明書を左手でかかげ検査官の検閲を受けた。一切の検査に合格すると、乗船が許可され、中国政府の大きな印を押した証明書のひもを首からはずし係官に渡した。

昭夫たちが乗船するのはアメリカのリバティV何号とよぶ貨物輸送船でした。乗船者は二千五百人、貨物船の横っ腹からタラップが降ろされて乗船がはじまった。荷物を背負った老若男女が前屈みで一歩一歩上っていく。敗戦後の満洲で過ごした日々を思わない者はいない。昭夫も、一足ごとに一年半の出来事を刻みながらタラップをのぼっていった。

昭和二十一年八月末、間もなく九月の声をきくという正午過ぎのことでした。

（毎週木曜日掲載）

黒豹

黒豹が私を見詰めている
黒豹が私を見詰めていることなら
私はすでに気がついている

私は黒豹に殺されるのだ
私はいくさでは死なないのに
私は病気では死ねないのに
私は何時か黒豹の鉄の檻をあけて
その鋭い爪で
無惨にひき裂かれるのだ

黒豹が私を殺すことは
私にとって必要なことだからだ

黒豹が鋭い爪と
稲妻のような牙と
ありあまる殺意を持っていることは
私にとって
すべて約束されていることだからだ

（詩集「動物哀歌」から）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ⑥⑤

小泉とし夫

■引き揚げ船にて

昭夫の乗る引き揚げ船はドラの音とともにコロ島を出港しました。赤茶色の地肌をむき出したコロ島の山、半島の丘陵の一角に小さなレンガ造りの建物が見える。昭夫には望郷の海を眺めた収容所とすぐわかった。

湾内、湾外のいたるところに船舶が停泊していた。旗を掲げた引き揚げ船ばかりでなく、戦争で座礁した破船とみられる船もあった。昭夫は破船から目を離さなかった。「破船のために／人よすすりなくな／なみだを落とすな／ただ絶えまない／いくさをのろえ」という詩の原風景で、破船とは自身をふくめた満洲難民にかさなった暗喩だったと思われます。

大陸は水平線にかすんでいった。昭夫は船艙に降りてゴザの上に横になった。波が大きさを増し船体がゆるやかに起伏する。ふと、昨年の三月末に博多から釜山に渡航した夜のことがよみがえった。

景福丸は、米潜水艦の襲撃におびえながら玄海灘をゆれていった。しかし今乗船しているのは米軍の輸送船なのだから、たった一年半の歴史のギャップを思うと空しい風がふきぬけていくようでした。

船は佐世保に向かっていた。食事の初日は白い飯だったが翌日から麦飯の粥に副食物としてサツマ芋、煮干し、海苔の佃煮（つくだに）が一日二食支給され、昭夫に学徒動員時代の食事を思い出させるものでした。

昭夫はコロ島での収容中や、乗船の間際でも命を落とす人をみたが、この引揚げ船のなかでも何人かがこの世を去っていった。船内の死者は、船内に保管された棺に納め、錘りをつけロープでつるして海中に落とすのです。

皆は持ち込まれていた花束を投げ入れて合掌した。棺が沈んだ海面は渦を巻いていて、船は静かに一周して別れを告げるのです。

こうして出港後から三日も海の色が濁っている黄海を航行し、五日目に玄海灘を越えました。五島列島はもうすぐでした。

（毎週木曜日掲載）

引揚船

引揚げてゆく船がある
それをせつない程知っているのに
見送る者は誰もいない
音もなく岩壁を離れ始めた
船の姿がある
消え入るようなマストの天辺には
一匹の蛙が鳴いているのだろう
新らしく生まれた星のように
はるかを見やって鳴いているだろう
静まり返った船室には
つぐみが固く眠っているだろう
それはもだえることをやめた
人と人との意識なのだろう
今また別れの証しのように
ひとすじの旗をあげて
見えなくなっていく船がある
やがて灰色の霧笛が遠く聞こえ出すと
何時か記憶したさまざまな蝶の群が
よろめくように
空に流れるのだ

（詩集「動物哀歌」から）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像

⑥⑥

小泉とし夫

■佐世保に上陸

深く澄んだ海に映える緑の島々は美しく、昭夫はやっと日本に帰ってきたことを自覚した。海面すれすれに飛ぶカモメも久しく忘れていた風景だった。引き揚げ船の近くを過ぎる白帆の漁船に向かって喚声をあげると、漁船からも手をふって応じました。

海岸線に緑鮮やかな山々が迫り、その中腹に畑や農家が点在している。「港が見えたぞー」と誰かが叫ぶ。船舶からデッキに上がってきて、港湾をめぐり建ち並ぶ倉庫や工場などの建物を指さしては感動を口にした。

たしかにここは佐世保港だった。大小さまざまな船舶が停泊している。リバティ船は狭く澄んだ湾口を通り抜けて湾内に入り、やがて投錨しました。

上陸の前に検疫がありガラス棒を肛門にさし込まれました。一人でもコレラの疑いがもたれると、船は港外の隔離場所に移動し何日も繋留させられる。なかには上陸ストップが三カ月に及んだコレラ船があって、発狂した女性が海に飛び込み自殺したという。

昭夫たちの検疫は無事だったので上陸が許可されました。佐世保埠頭の岸壁は米軍に接収されていたので、その対岸の浦頭港の木造桟橋に船は接岸しました。

船が横づけになると女子供を先頭に上陸し、消毒のためDDTの散布をうけました。この浦頭には佐世保引揚者援護局検疫所があった。検疫の後、七キロの坂道を上り下りして宿舎である元針尾海兵団の兵舎へ向かった。

この宿舎で、昭夫は引き揚げの手続きをしました。引揚者証明書に氏名、本籍、引揚前住所、職業、落着き先、下車駅名を書いて届け出ました。証明書に第〇〇〇号と番号を打たれ、引揚直前の収容所でもらった千円の預り証と引き換えに現金をもらい、外食券や乾パンの何食分、主要食料や味噌醤油特配購入券をもらい、海軍の軍服・下着・靴下などの支給もあって、それから懐かしい東北本線盛岡駅までの切符をもらったのでした。

（毎週木曜日掲載）

海の向こう

海の向こうになにも見えぬ
そう思った時私は
つぶらな眼のかいつむりだった
空の向こうになにも見えぬ
そう思った時私は
青いうす肌のなよたけだった
だが生きる向こうになにも見えぬ
何時の日か新しく
そう思うようになる時
深い湖水の公魚になろう
それとも公魚にまわりつく
透明な湖の水滴となろう
それからは黒い影を落してくる
さまざまに生きる人達のために
湖底のような静かな唄を
さやさやと唄い続けて行くだろう
海の向こうの海のように
空の向こうの空のように
そしてなによりも生きる向こうの
生きるその果のように

（詩集「動物哀歌」から）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑰

小泉とし夫

■引き揚げ列車の長旅

引き揚げ証明やら帰国の手続きなど終えた昭夫はただただ眠かった。針尾海兵団宿舎の布団に横になるやすぐにも大いびきをかいた。約一年半にわたる渡満以来の疲れが布団の綿に吸われていくようでした。

翌日の朝、昭夫は体をふいてから支給された衣類に着替え佐世保の街に出ると、米兵がジープで通り過ぎていった。ふと、街を流れている唄に昭夫の心がひかれた。さわやかでとても明るいメロディーだった。あとで「リンゴの唄」だとわかったが、帰国して最初に耳にした流行歌でした。

昭夫は二日間の宿舎をあとにして引き揚げ列車に乗ることになった。引き揚げ者の群れは大きな橋をわたり崖道を南風崎（はえのさき）駅へと向かった。駅付近の民家の庭に青いカキの実が光っている。盛岡郊外の農園では夏リンゴが熟している季節だと昭夫は思った。間もなく九月中旬のころでした。

南風崎駅から盛岡駅までの鉄道路線はたいへんなものです。大村線で早岐に出て、長崎本線で博多へ、さらに鹿児島本線で門司港から下関に渡り、下関駅から山陽本線で大阪駅に着き、こんどは東海道本線に接続して東京駅に着いてから上野駅に出て、東北本線に乗り換えます。盛岡駅に到着するまで列車内でまるまる三日間は過ごさなければならないほど長距離なのです。

引き揚げ列車は各路線での連絡がスムーズに編成された臨時ダイヤでした。南風崎駅を午前十時前にたち、下関には午後四時ごろ、周防灘から瀬戸内海へと残照のこる島々をあとにして、広島駅の通過は夜中で原爆の傷跡は闇に包まれていました。

昭夫は車窓に目を凝らしながら、昨年三月に目撃した東京空襲の惨状を暗闇に重ねていました。大阪駅に到着したのは午前十時すぎで、プラットホームには若い学生たちが長旅で疲れきった引き揚げ者に「ご苦労様」と声を掛け、かいがいしくお茶を接待しているのです。その温かさが昭夫ののどにしみていきました。東京に着いたのは夕方六時を回ったころでした。

（毎週木曜日掲載）

お母さん

お母さん
海の音を聞かして下さい
海の貝殻の音を
母という名を聞かして下さい

私は思い出す
二億年ばかり前のこと
あなたが二億年変らない海だった日を
ひたひたと広がるあなたのなかに
可憐な三葉虫の姿が
奇蹟のように生れていた日のことを

私はもっと思い出す
それからの火や泥の世界のことを
試みられていた愛のつぶつぶが
氷河よりも固く凍ってしまった
永い暗かった時間のことを

お母さん
その時あなたのなかに鳴り続けた
小さな貝殻の終りのない音が
どんなにやさしくて強かったか
今日も波が寄せています
とても永かったあなたの疲労のように
貝殻がさやさや鳴っています

お母さん
あなたの音を聞かして下さい
あなたの白い貝殻の音を
静かに聞かして下さい

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像

⑥⑧

小泉とし夫

■不思議なリンゴ

東京駅から乗り換えて昭夫はやっと上野駅にたどり着きました。十九時十分発青森行に乗車すれば、明朝の十時半ごろには盛岡駅に到着するはずです。引き揚げ者のなかには佐世保の宿舎から到着する時間などを郷里へ打電する人たちもあった。しかし昭夫は億劫（おっくう）で知らせていなかったから、昭夫がすでに帰国して上野駅のホームにいることなぞ、加賀野の両親はまったく知るよしもなかったのです。

昭夫が満洲より両親に便りをしたのは昨年の五月、着任して間もないころだけだった。ソ連軍の侵攻後はまったく消息不明で、昭夫の安否を気遣う母タマカは仏壇に毎朝陰膳を据えて無事を祈っておりました。

盛岡区裁判所に勤める父三好は、危険な満洲に渡る昭夫を引き止めるどころか、ほっとして送り出したことにひどく自責を感じておりました。敗戦後の旧満洲国における事件や居留民の悲惨な状況が新聞に報じられるたびに、昭夫の身の上が案じられて三好はじっとしていられなくなるようでした。

ある時、友人を招じて酒を飲みながら「昭夫はもう帰ってこない。昭夫に済まないことをした」といって涙をこぼしたと言います。

九月半ばの盛岡はさわやかに秋風がふき、早生のリンゴも熟してくる季節です。村上家では加賀野の近くに小さな家庭菜園をもっていて三好は朝早く畑に通っていました。ある日の朝、その途中の道にリンゴが一つ落ちていて、翌日もその翌日もやはりリンゴが一個こぼれ落ちていた。そんなことが三日続いたので「ずいぶん不思議なこともあるもんだ」と自宅に戻った三好が家人に洩らしました。

その不思議なリンゴ事件の三日目の十一時ごろのことです。「ただいま」という声がしてタマカが出てみると、そこにはくたびれた軍服姿の昭夫が玄関に立っていたのでした。

（毎週木曜日掲載）

村上昭夫が所有していたH賞副賞のモンブラン製万年筆と緑色のセルロイド筆箱に入った文具類一式（盛岡市先人記念館所蔵）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ⑲

小泉とし夫

■第一章の終わりに

昨年（二〇〇一年）の三月八日「昭夫とわたし」からスタートした「動物哀歌」の詩人〈村上昭夫の肖像〉は毎週木曜日に連載されてきたが、一年三カ月を経て六月二十七日の第六十八回「不思議なリンゴ」をもって、ひとまず第一章を終えることにしました。

村上昭夫が詩人として大成したことは、わたしたち中学時代の同級生には衝撃的な事件であり、昭夫を知る級友には理解を超えた永遠のナゾのようでもあったのです。それほど中学時の昭夫は学業も平均的で、文学の片鱗を感じさせることもなく、ごくありふれたおとなしい少年とみられていました。

そんな少年が、どうして卓越した詩人に変身しえたのか。その動機には何があったのか。〈永遠のナゾ〉のもつれた糸口がどこにあるのか、わたしたちには見当もつかなかったのです。

その糸口を提供してくれたのは昭夫の令弟村上達夫さんでした。一年半ぶりに敗戦後の満州から帰宅してきた兄昭夫が渡満する以前より「性格がすっかり変わっていた」印象だったというのです。

控え目でおとなしい兄が「恐ろしく積極的」に変身して帰還したという証言に、深刻な意味を感じ取られました。

沖縄戦、東京空襲、広島・長崎原爆体験に匹敵し、またはそれより悲惨な受難体験が、敗戦後の満州居留難民にあったのです。辛うじて生還した引き揚げ者によって、おびただしい慟哭（どうこく）の手記がつづられています。

昭夫もそうした難民の一人でした。昭夫は手記のかわりに詩をもって体験をつづったのではないか。病根とともに詩魂もまた満州体験にもらったものとわたしは直感しました。昭夫の満州体験に密着して考察してみようとしたのは、そうした直感によるものでした。

第一章（六十八回）のほぼ半数を満州体験の叙述にあてました。まだまだ書き足りないという不満もありますが、満州での旧友や家人の記憶に支えられながら、空白だった満州時代の昭夫の肖像に少しはアプローチできたと思っています。

後日、第二章を執筆するつもりですが、長期間の掲載を許していただいた盛岡タイムス社と読者の皆さんに紙上より厚く御礼を申し上げます。

（毎週木曜日掲載）

終りに

終りに三つの真実が立つだろう
砂漠と沼沢地と大雪原
砂漠の鳥と沼沢地のマングローブと雪原の風だ
終りに鳥のようなものが飛び
マングローブのようなものが生え
風のようなものが吹くだろう
其処から
明るい明日が生まれるというのは嘘
生まれるものを予告するのは嘘
だからだから
終りに砂漠の鳥と
沼沢地の鳥とマングローブと雪原の風が
最後のとりでのように立つのだ
鳥のようなものが飛び
マングローブのようなものが生え
風のようなものが吹く時が来ているのだ
世界の待ち望んでいた
その時が来ているのだ

（詩集「動物哀歌」より）